様式3

平成31年2月7日

平成30年度　結果の分析及び今後の改善策（案）

（ 中間・最終 ）

蒲刈中学校区　校番　24　学校名　蒲刈中学校

重点	d 中期（3年間）経営目標	e 短期（1年間）経営目標	l 結果の分析（結果と課題をこう考えます）	m 今後の改善策（案）（こう改善します（案））
***	変化に対応して挑戦でき，「深く」「先を見て」考え行動する生徒を育てる	知識・技能の確実な定着 ★確実に定着させた学習内容を活用し，困難や変化を多面的にとらえ，解決しようとする生徒の育成	すべての授業において学習内容の理解が予習段階から進んだ生徒の割合を調査したところ，上半期では72%だったが，下半期は93%に上昇した。特に上半期で割合が低かった2・3年に大幅な改善が見られた。振り返りシートの自己評価の基準が個人によって差があるという課題について，校内研修で検討し，評価基準を明確にし示していったことが要因と考えられる。 100問暗記週間を継続した結果，国語については正答率90%以上又は前回より得点をあげた生徒が12人中11名であった。英単語は12人8人中であった。達成できなかった生徒の状況は，得点が下がったもの4人のうち1人は2点以内の減少なので，誤差範囲と考える。しかし，2名については，英単語暗記について苦手意識をもっている。1名は前回80%から60%になっており，学習時間の不足が考えられる。	学力の確実な定着は，今年度だけの取組ではない。振り返りに書かれている内容の質の向上が，授業における内容理解と関連が深いことが分かってきたので，引き続き振り返りの時間を確実に設定し，授業改善に取り組む。 担任を中心に，毎日放課後時間をかけてトレーニングをつんでいるが，集中が途切れるケースもある。少ない数の暗記を繰り返し行い，継続していくことが必要である。広大の研究チームと協力して，それぞれの生徒にあった学習を模索していく予定である。
		思考力・判断力・表現力の育成 ★グローバルな視点や多様な考え方を踏まえて先を読み，課題解決や未来を拓くための行動ができる生徒の育成	授業中，生徒同士で教え合う学習場面があるときは意欲的である生徒の割合は100%から83．3%に下がった。自己評価が下がった生徒について聞き取りをしたところ，積極的かどうかは教科によって違うため，厳しく評価したとの回答だった。各教科によって教え合いや思考を深める学習場面の設定割合に差があることは確かだが，その生徒は教え合う場面で消極的な様子は見て取れないため，自己評価が厳しかった結果と考えている。 読書冊数1人月3冊以上読む生徒の割合は12人中11人は達成できた。残り一人については，上半期と下半期で違う生徒である。月によっては目標の3冊を超えているときもあった。あと1冊で目標に達するところだった。 3学期は持久力についての継続的なトレーニングを行った。その結果，男子は7人中5人，女子は5人中4人が記録を伸ばせた。男子で記録が伸びなかった生徒はいずれも3年生で，部活動が終わり入試の影響もあり，運動量が日常的に減っていることが要因と考えられる。女子は，上半期2人が未達成だったが，下半期は1人で，目標値は達成できた。女子の1人は足に故障がある生徒なので持久走でなかなか記録があがらない状況がある。	授業改善を学校体制で進めているので，継続する。主体的で，対話的で，深い学びをめざすために，学んだことを自分の言葉で説明できることを1つの指標にして取組をすすめる。 目標をもたせて下半期も生徒会を中心に読書週間を継続する。 授業中に継続的なトレーニングを行い，体力の向上に努める。部活動でも冬場は，準備体操に走ることを取り入れている。
**	地域を愛し協働して貢献でき，夢を抱き夢への道を拓く生徒	自己の生き方を考える力の育成 ★夢を持ち，夢を語り，志高く自己の生き方を考え，地道によりよく生きるための努力をする生徒の育成	合同発表会，合同運動会などの機会を通して，生徒の表現活動についての地域・保護者アンケートの肯定的評価の割合を調査したところ，100%だった。このことから，生徒の発表等について，しっかりとした内容と表現力で地域や保護者に発信できていると考える。 挨拶・返事・靴揃え，5分前行動，掃除，後片付けの徹底について生徒の肯定的評価の割合は，上半期は100%だったが，下半期は85.4%に下がった。下がった項目は特に「返事」の大きさである。これは，学校として課題であるととらえ，日頃折に触れ生徒にも指導しているところである。生徒の中にも特に返事や発表の声が小さいことは課題意識が高まった結果と考える。	学習した内容を，自分の生き方と関連付けて考えさせ，自分のことばで発信できる機会を継続的に作っていく。 少人数でこじんまりとした範囲での学習のため，小さな声でも聞こえることで，現状に甘んじず，教員が，日常の授業等で意識した指摘と指導を行う。
		協働的に関わる力の育成 ★地域や仲間を愛し，相手の気持ちを尊重して協働し，積極的に貢献しようとする生徒の育成	地域貢献のためのチーム蒲刈プロジェクトを推進した結果，「ふるさと（蒲刈やとびしまなど）について考えるいい機会になっている」「ふるさと（蒲刈やとびしまなど）について，いいところや自慢などを感じる」と答えた生徒は100%だった。このことから，ねらっている資質が育っていると考える。 地域協働意識を持たせるために，生徒会活動や地域活動への積極的参加の機会をつくってきた。意識調査の結果，生徒が積極的に参加していると答えた割合は91.7%だった。下半期は具体的な地域貢献活動がなかったことが要因と考える。	引き続き，総合的な学習の時間や生徒会を中心とする地域貢献活動を組織的に実践し，地域を愛し，地域と協働していくことができる資質能力を育成していく。 引き続き，地域とともに協働できる機会を提供し，地域ボランティアを推奨していく。3月には地域貢献活動を2つ計画している。
*	働き方改革の視点で業務改善を行う	組織的な協働による効率的な仕事分担	効率的な仕事できるよう，職場での協働を意識できたかの教職員の割合で検証した結果，90%の教職員が肯定的評価だった。上半期が100%だったので，割合は下がった。一人当たりの仕事量が多いため，仕事が集中する時期は自分での仕事がいっぱいになるため，人にも頼みにくくなったからではないかと考える。	管理職が，仕事の進捗状況を把握し，早めの助言や仕事量を選らすなど調整を引き続き実施し，スクラップ＆ビルドを積極的に行って，仕事量全体を調整する。